

山梨県北巨摩郡白州町

教来石民部館跡

発掘調査報告書

1989

白州町教育委員会

山梨県北巨摩郡白州町

教来石民部館跡

発掘調査報告書

1989

白州町教育委員会

序

この報告書は、昭和63年度発掘調査された、白州町鳥原に所在する教来石民部館跡の報告であります。

城主である教来石氏は、武田家支流の一条氏から派生した在地の武士団、いわゆる武川衆の一員であります。武川衆は、武田宗家に忠誠を尽し、幾多の合戦で勇猛な働きをしたと古来より伝えられています。また、武川衆は、信濃鐵口の国境防衛にも大きな功績があったと言われています。そのなかで、教来石氏の封地は、最も国境近く、この館の持つ重要性も自ずから知ることができます。

また、館の名称ともなっている教来石民部は、後に抜擢され、武田家重臣の列に加わった馬場美濃守信春で、武田騎馬隊を率いて不敗を誇った勇将であったことは、あまりにも有名な話であります。さらに、武田家の占領地に築かれた城館の多くは、馬場美濃守の繩張によるもので、たぐいまれな才能の持ち主であったことがしのばれます。

この館は、教来石氏が一条氏より派生してから、馬場氏を名のるまでの間、武川衆の一員として活躍した代々の居城でありますが、築城から廃棄までの年代・城主が明らかな城館は全国的にも少なく、歴史的価値は高いと言えましょう。

今回の発掘調査は、開発計画に対する基礎資料を得ることを目的とし、堀跡を中心館の範囲を確認することに主体をおいたため、小面積の調査に限られましたが、数多くの貴重な発見がありました。幅5.6m、深さ2.8mの薬研堀の発掘等はその一例であり、中世城館の防備の堅牢さを理解することができます。

この調査の結果は、教来石民部館跡全体から見れば、中間報告にすぎませんが、教来石氏の館の特色、教来石氏を含む武川衆の営みの姿など中世史を解明するためのひとつの資料として、多くの方々に活用していただければ幸いであります。

ここに本調査の報告書の発刊にあたり、山梨県教育庁文化課の皆様をはじめ、鳥原、松原両区長を中心として直接調査にご協力をいただきました皆様方、並びに発掘を快く承諾して下さった地権者の方々に対し、衷心から御礼を申し上げ、この報告書の序といたします。

平成元年3月

白州町教育委員会

教育長 道村初夫

例　　言

1. 本書は、昭和63年度発掘調査された、山梨県北巨摩郡白州町に所在する教米石民部館跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、文化庁・山梨県より補助金を受けて、白州町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び出土品の整理は、白州町教育委員会で行った。
4. 遺構の実測は、株式会社パスコへ委託して行った。
5. 地中レーダー探査は、テラ・インフォメーション・エンジニアリングに委託して行った。
6. 遺物の実測、写真撮影、本文執筆及び編集は折井が行った。
7. 遺構及び遺物のトレースは、水石が行った。
8. 発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏にご教示いただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）
新津健・米田明訓・坂本美夫・森和敏・八巻与志夫・萩原三雄・佐野勝広
・畠大介・武藤雄六・小林公明・樋口誠司
9. 本調査の出土品・諸記録、図面・写真等は、白州町教育委員会が保管している。
10. 本調査にあたり、山梨県教育庁文化課及び地元鳥原区、松原区の皆様に御理解・御指導をいただいた。心から謝意を表する次第である。

調　　査　組　織

調査主体　白州町教育委員会（教育長　道村初夫）

事務局　宮沢元一（教育課長）・山口光茂・名取利之・伊藤早苗
古屋明美・植松良治・山田健二・折井　敦（調査担当）

調査参加者　名取ウメ子・野口コウ・渡辺徳子・名取キヨミ・名取春江・
松野重雄・名取勉・田中耕一・大輪つね子・宮沢正明・
井上君江・伊藤松子・名取佐紀子

整理参加者　水石佐江子・名取佐紀子

目 次

序

例 言 ・ 調 査 組 織

目 次 ・ 凡 例

挿 図 目 次 ・ 図 版 目 次

I 調査状況	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査経過	1
II 位置と環境	3
1. 自然環境	3
2. 歴史的環境	3
III 遺構	8
1. トレンチ別遺構状況	9
2. 地中レーダー探査結果	19
IV 遺物	20
V まとめ	27
参考文献	28

図版集

凡

例

1. 遺構平面図のメッシュは、国土地理院の座標方向である。
2. 遺構平面図は、第6トレンチ墓壙を除き、すべて縮尺100分の1である。
3. 遺構断面図は、すべて80分の1である。

挿 図 目 次

第1図 教来石民部館跡位置図	2	第21図 第7トレンチ断面図	17・18
第2図 教来石民部館跡と周辺の遺跡	4	第22図 地中レーダー探査結果図	19
第3図 教来石民部館跡と周辺の城館跡	6	第23図 第1トレンチ堀底出土上土器	20
第4図 教来石民部館跡調査区域図	7・8	第24図 第2トレンチ出土土器	20
第5図 第1トレンチ平面図	10	第25図 第5トレンチ出土土器	20
第6図 第2トレンチ平面図	11	第26図 第6トレンチ出土土器	20
第7図 第4トレンチ平面図	11	第27図 第8トレンチ出土土器	20
第8図 第3トレンチ平面図	12	第28図 第7トレンチ出土土器	20
第9図 第5トレンチ平面図	13	第29図 第1トレンチ堀底出土土器	22
第10図 第6トレンチ平面図	14	第30図 第8トレンチ堀内出土土器	23
第11図 第6トレンチ墓壙	14	第31図 第3トレンチ出土陶器	23
第12図 第8トレンチ平面図	15	第32図 第4トレンチ出土陶器	23
第13図 第7トレンチ平面図	16	第33図 第7トレンチ出土古銭	24
第14図 第1トレンチ断面図	17・18	第34図 第1トレンチ堀底出土石臼	24
第15図 第3トレンチ断面図	17・18	第35図 第2トレンチ出土石臼	25
第16図 第8トレンチ断面図	17・18	第36図 第6トレンチ墓壙出土石臼等	25
第17図 第2トレンチ断面図	17・18	第37図 第8トレンチ出土石臼	25
第18図 第5トレンチ断面図	17・18	第38図 第2トレンチ西発見石臼	26
第19図 第4トレンチ断面図	17・18	第39図 教来石民部館跡遺構現況図	27
第20図 第6トレンチ断面図	17・18		

図 版 目 次

図版1 上…教来石民部館跡遠景、中…教来石民部館跡より見た笹尾岩、下…館跡現況	
図版2 上より南側空堀、東側空堀部、西側空堀部	
図版3 上…1トレ全景、中…1トレ空堀・犬走り、下…1トレ下層繩文中期住居跡	
図版4 上…2トレ北側繩文中期住居跡、中…2トレ南側池状遺構、下…3トレ空堀発掘状況	
図版5 上…4トレ全景、中…5トレ全景、下…7トレ全景	
図版6 上…6トレ全景、中…6トレ墓壙内人骨出土状況、下…8トレ全景	
図版7 上…1トレ堀底出土土器、中…2トレ出土土器、下…3・4トレ出土陶器	
図版8 上より5・6トレ出土土器、7トレ出土土器、8トレ出土土器、7トレ出土古銭	
図版9 上より1トレ出土石臼、2トレ出土石臼、8トレ出土石臼、6トレ墓壙出土石臼	
図版10 2トレ西発見石臼（上臼、下臼）	
図版11～13 地中レーダー探査関係	

I 調査状況

1. 調査に至る経過

山梨県北巨摩郡白州町鳥原字上小用507番地他に所在する教来石民部館跡及びその周辺は、古くより、縄文時代から中世にかけての遺物が表面採集されることで知られていた。地目は畠で、その多くは養蚕のため桑畠として使用されていたが、最近では養蚕農家も激減し、桑畠の多くは手が入らないまま、荒地化している。

しかし、昭和62年7月、教来石民部館跡内の地権者より、桑の木を抜根し、普通畠に変更したい旨の打針があったが、同地が館跡であることやいくつかの埋蔵文化財包蔵地が周辺に分布していることなどから、その取り扱いについて県文化課の指導を求めた。その結果、抜根により造構に影響が及ぶと判断され、今後の開発計画に対する資料収集も含め、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、国・県からの補助金を受け、町教育委員会が主体となって行った。調査範囲は調査対象面積20,000m²、発掘調査面積430m²である。

昭和63年9月22日付け、白教発第9-24号で文化財保護法第98条の2第1項の規定による、埋蔵文化財発掘調査の通知書を、文化庁長官（県教委経由）に提出する。

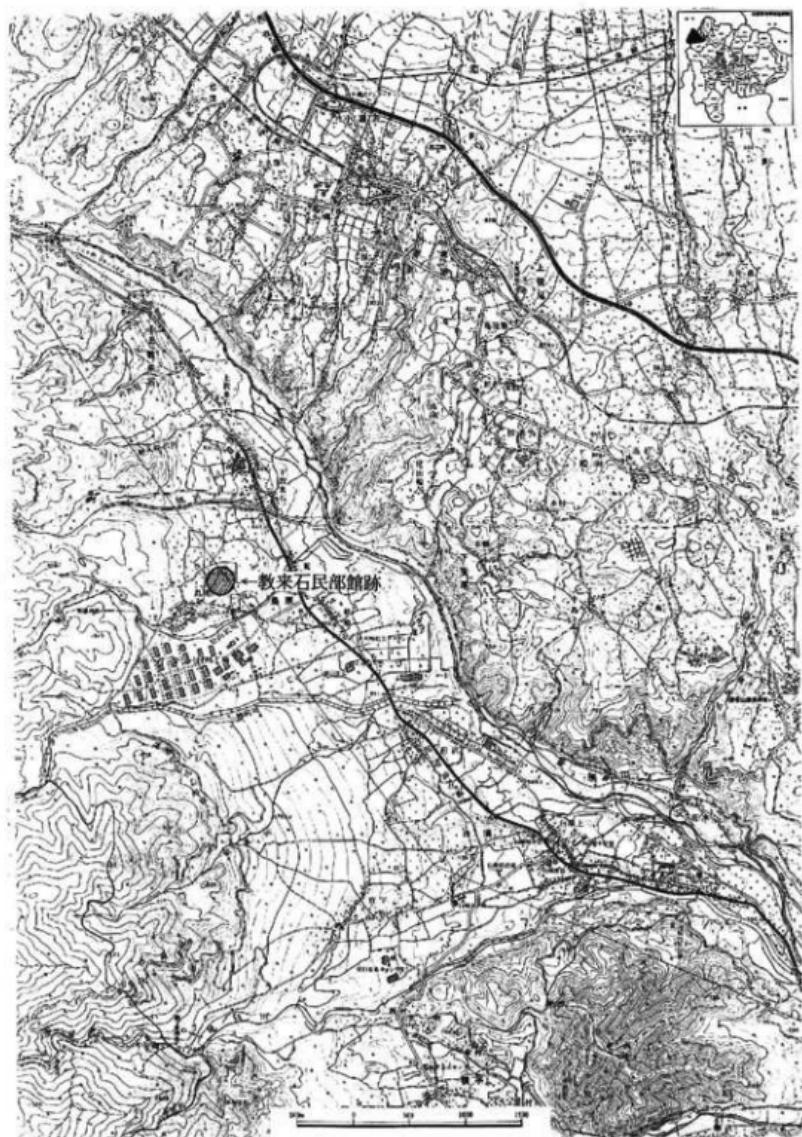
2. 調査経過（第4図）

発掘調査は、昭和63年10月4日から開始し、12月2日現地調査を終了した。その後、報告書作成までの整理作業を完了したのは、平成元年3月31日であった。

まず、調査に先立ち、地籍図及び現地で確認できる、2本の南北に細長い地割を堀跡と推定し、その地割内及び北側の延長線上に発掘区（1・4・3・8トレンチ）を設定した。しかし、4トレンチは、383-1番地の作物の関係で433番地のみの発掘となり、その代わりとして5トレンチを設定した。また、6トレンチは5トレンチで堀跡が終結したため、だめ押しの意味で設定した。7トレンチは、南側に現存する堀跡と東西の堀跡で囲まれる方約1町の北側のライン上に設定した。なお、2トレンチは方1町で囲まれるほぼ中央である。トレンチの大きさは、2トレンチのみ5m×10mであるが、他は幅4m、長さ6～19mである。

発掘調査は、表土剥ぎの一部を重機で行ったが、大部分は人力により行い、空堀跡・柱穴群等の造構や中世の遺物を発掘した。なお、中世の造構の下層は、縄文中期の集落遺跡で、住居跡や多量の土器・石器が出土している。

発掘調査に併行して行われた、地中レーダー探査では空堀跡や溝状造構が鮮明に確認され、西側の空堀跡は、細長い地割が切れた部分で、西方向に曲がっていることが判明した。そのた



第1図 教来石民部館跡位置図

め、探査を西側の掘跡のさらに西へ広げ、空堀跡の延長を確認したほか、溝状遺構も確認された。

調査の結果、館跡は当初予測した範囲に止まらず、西側に広がっている可能性を推定し、現地調査を終了した。

昭和63年12月7日付け、白教発第12—3号で遺失物法第13条の規定による、埋蔵物発見届を長坂警察署長に提出した。

II 位 置 と 環 境

1. 自 然 環 境

教来石民部館跡の所在地は、山梨県北巨摩郡白州町鳥原字上小用・東原他にあって、東へ約700m隔てて国道20号線が、ほぼ南北に走っている。館跡から南西300mに鳥原集落の中心がある。また、釜無川は東1200m付近を北西より南東に流れている。

本館跡周辺の地形は、釜無川によって形成された高位段丘面を基盤としているが、平坦ではなく、西から東へ緩やかに傾斜している。また、段丘面上には微地形の小谷が幾筋か見られる。なお、この段丘面の北側は流川に、南東側は松山沢川に削られ、急な段丘崖となっている。

本館跡は、段丘面上の南端の眺望のよい位置に立地し、標高は710~720mである。現況は、桑畠及び普通畠で、荒地化している部分も多い。

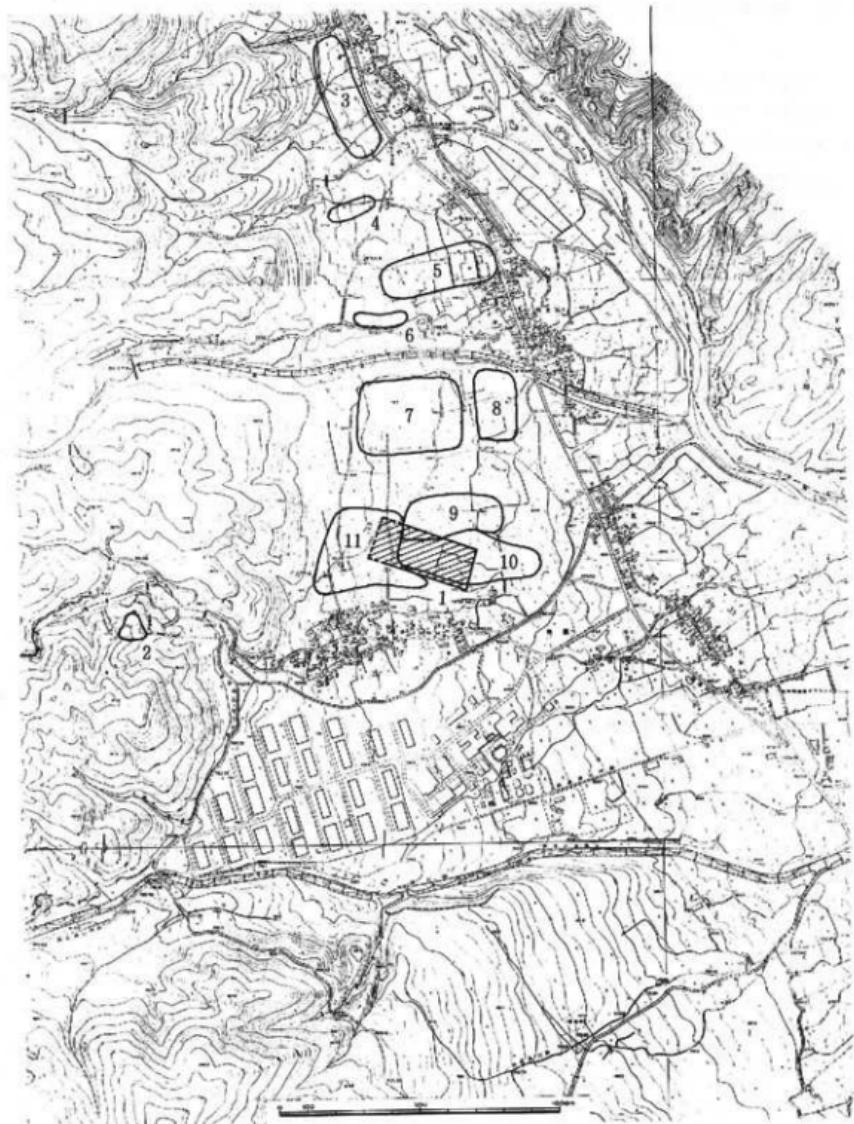
なお、地山はローム層である。

2. 歴 史 的 環 境

白州町内には、分布調査等により現在62か所の遺跡が知られており、年代は、採集された上器や石器から見て、縄文時代から中世にかけてのものである。

さて、教来石民部館跡周辺の遺跡を見ると、いずれも高位段丘面上に立地し、この段丘面上の最も北寄りの上教来石地区には、中世を主体とする宮の前遺跡があり、土師質土器や内耳土器等が散布している。その南側の下教来石地区では、当地では極めて珍しい縄文早期末から前期初頭の土器が散布する板橋遺跡がある。この遺跡の北西側には中世の加久保遺跡、南西側には縄文及び中世の道明遺跡がある。

鳥原地区では、段丘北東側に浦門遺跡・北西側に大久保遺跡があり、いずれも北側を西より東に走る流川に面して立地し、年代も縄文中期・平安・中世となっている。段丘面の中央部から南側にかけては、本館跡の範囲と重複する位置に、縄文中期・平安・中世の遺物が濃密に分布する、南沢遺跡・東原遺跡・上小用遺跡の3遺跡があるが、遺物の分布状況から見れば、途



第2図 教来石民部館跡と周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	主な時代	6	道 明	下教来石 字道明	繩文（中）・中世
1	教来石民部館跡	鳥原字上小用	中世	7	大久保	鳥原字大久保	占墳・平安・中世
2	鳥原の城山	鳥原字城山	中世	8	浦 門	鳥原字浦門	繩文（前・中）・ 平安・中世
3	宮 の 前	上教来石 字宮ノ前	繩文（中）・中世	9	東 原	鳥原字東原	繩文（中）・平安・ 中世
4	加久保平	下教来石 字加久保平	繩文・中世	10	上 小 用	鳥原字上小用	繩文（中）・平安・ 中世
5	板 橋	下教来石 字板橋	繩文（前・中）	11	南 沢	鳥原字南沢	繩文（中）・平安・ 中世

切れなく散布していることから、1遺跡と見て差し支えないものと考える。また、これら3遺跡の中世の遺物は、教来石民部館跡のものと考えられる。

なお、館跡より南側には、遺跡は確認されていない。

このように、教来石民部館跡周辺の遺跡は、一部の例外を除きすべて中世の遺跡を含み、いずれも館跡の北側に分布するという共通点があり、この地に封を得た教来石氏の家の子郎党の配置等から、経営の特徴を知ることができよう。

次に、教来石民部館跡周辺の城館跡を見ると、西に1.2km離れた石尊神社裏手に、鳥原の城山（山城）があり、この館跡の要害と見られるほか、眺望が極めてよいことから物見、烽火台として使用されたことが推測される。また、館跡より東に1.8km離れた釜無川対岸の七里岩の断崖上には猿尾砦がある。甲斐国志によると「…<前略>…此ニテ鐘ヲ鳴セバ鳥原ニテ大鼓ヲ打チ相應ズ…<後略>…」と伝えられ、これら3遺跡が甲信国境の防衛上、緊密に連携して行動していたことがうかがえる。

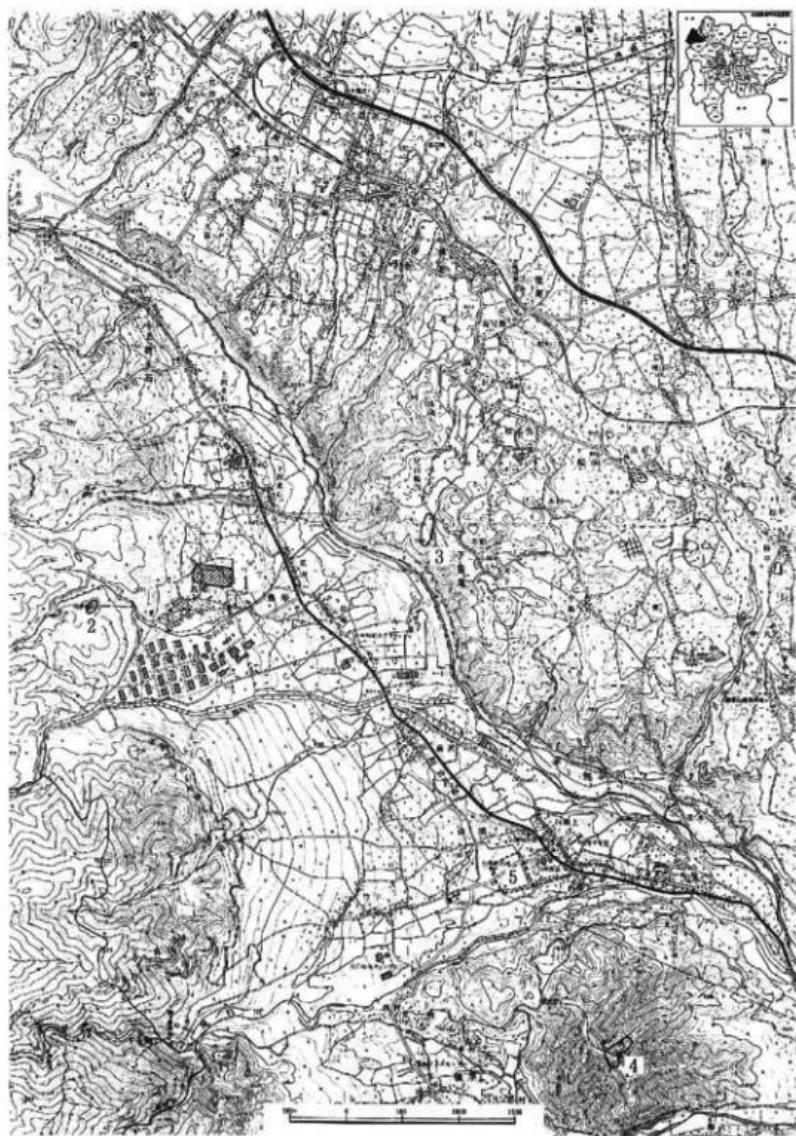
館跡より南に3.3km離れた中山の頂上に中山砦がある。眺望は極めてよく、望楼を備えた烽火台で、要害を兼ねていた。

文献資料から見ると、教来石氏は武川衆という同族武士団に含まれる。武川衆は、武田信光の四男、一条六郎信長の孫の時信（没年、1321年）が、白次（白須）・慶良吉（教来石である。毛浦吉とも書く。）・牧原・鳥原・両境（不詳）・青木・山高などの村々へ、七人の子らを分封したのに始まる。それぞれの家は、青木氏から柳沢・折井・山寺・横手氏が派生するがごとく、分家を出した。

これら、武川衆に封を得た時信の諸子は、封地に屋敷（館）をかまえ、家の子郎党を封地の防備に適した配置を行い、農耕・養蚕等の経営にあたったものと見られる。なお、分封された時期は、時信の没年から見て鎌倉時代の末期と見られる。時信が開基した一蓮寺に残されている『一蓮寺過去帳』にも、初期武川衆とも言うべき、時信に極めて近い子孫の南北朝期から室町初期にかけての武将の記事が多く見えることからも明らかである。教来石氏に関しては、貞治二（1363）年に毛浦吉、法名性阿が卒している。

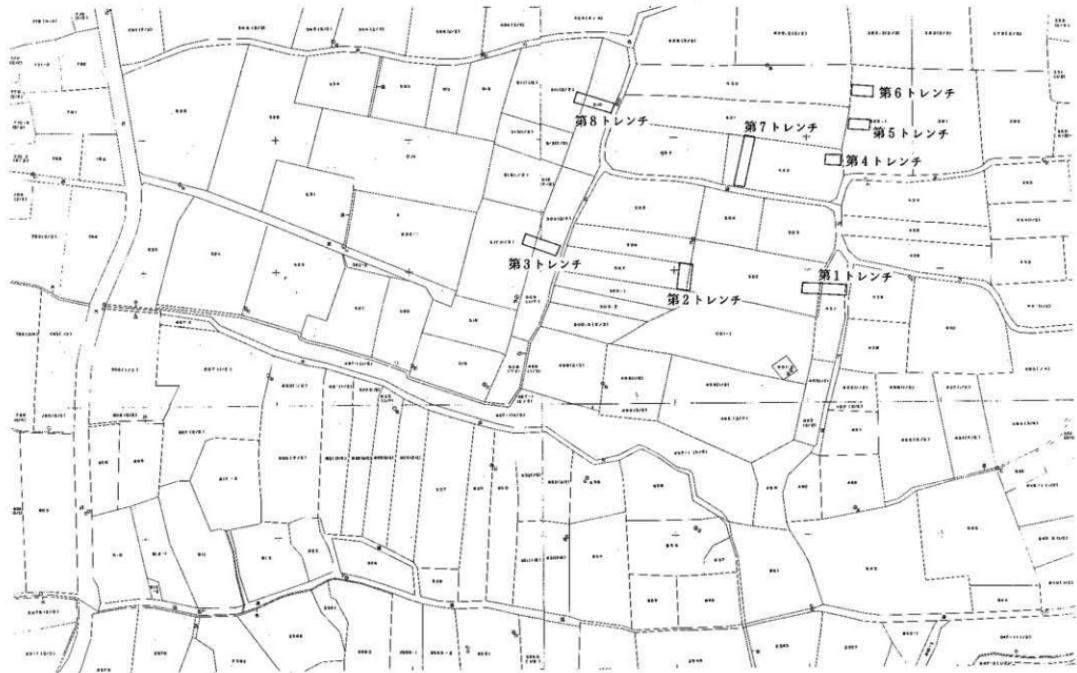
その後、教来石氏を含む武川衆は、武田一条氏の支流の立場を守り、宗家武田氏と行動を共にし、幾多の合戦に出撃している。

戦国時代に入り、教来石氏は再び文献に登場する。教来石民部景政である。軍功が数多くあ



第3図 教来石民部館跡と周辺の城館跡

1. 教来石民部館跡
2. 鳥原の城山
3. 笹尾砦（小瀬沢町）
4. 中山砦
5. 馬場美濃守館跡



第4図 教来石民部跡調査区域図（1：1500）

ったと見られ、甲陽軍艦には、天文十五（1546）年に武河衆教来石民部を擷テ五十騎の侍大将とし、姓を馬場氏に改め、民部少輔と称すとあり、武田信玄（晴信）の厚い信頼を受けたことがわかる。

甲斐国志等によれば、教来石民部から馬場民部に改めた後、その居館を鳥原より白須（第3図-5）へ移したとされるが、その時期等については不明である。

III 遺構

1-2の「調査経過」でも触れたように、調査は1~8トレンチの発掘による空堀跡を中心とする遺構の確認と、地中レーダー探査による空堀跡や溝状構造の位置・方向を確認する方法と併用して行った。

以下、トレンチ別の遺構状況と地中レーダー探査結果について触れてみたい。

1. トレンチ別遺構状況

第1トレンチ（第5・14図・図版3）

東側の堀跡と見られる細長い地割り部分と現況で1.2m高い館跡内側にかけて設定した、幅4m、長さ17mのトレンチである。

トレンチ東側の細長い地割り部分に、幅5.6m、深さ2.7～2.8mの薬研堀の空堀跡が確認され、最深部には幅70cm、深さ30cm程度の水路状の溝が掘り込まれている。この溝は北から南へ緩やかに傾斜し、砂や礫を多量に含む粘性土が覆う。この溝からは、土師質土器・内耳土器・上師質のすり鉢及び凹石状石器といった中世遺物が出土している。これらの遺物は、その出土状況からこの館跡の最終年代を示しているものと見られる。

空堀跡の土層は複雑ではあるが、第7層上面を境として上下に大別できる。下層は、館廃棄後に堀の壁面が風化し崩落した第12層を除けば、砂ないしはシルト質の水成堆積物で覆われている。上層は、後世に人为的に埋め戻されたものと見られる。

空堀の内側には、幅1.5m程度の犬走りが延びており、中世の地表面と見られる第15層上面とは、約1.2mの段差をもっている。なお、犬走り内側の壁ぎわには、土止めと見られる砾や板材を立てたと考えられる浅い溝が走っている。

犬走り内側の中世の地表面（第15層）上部には、第14層の固くしまった黒褐色土があり、土壌の残痕の可能性がある。

館内部は、第15層上面で整地され、この層中には1.8m程度の間隔で、礎石と見られる砾が並んでいる。

なお、第16層は縄文時代中期住居跡の覆土で、遺存状態は良好である。遺構は全体のほぼ4分の1がトレンチにかかり、直径7m程度の円形住居跡と見られる。炉跡は中央やや北寄りに構築された、偏平の河原石を平たく並べた大形の円形石圍炉である。柱穴は3本検出され、直径60～70cm、深さ50～70cmを測る。なお、この住居跡は、地山への堀り込みはほとんど認められない。

遺物は多量に出土しており、復元及び復元可能土器は深鉢を中心に20個体にも及ぶ。また、石器も打石斧を中心に50点程度となっている。年代は、土器の特徴から中期後半の曾利Ⅰ式の新しい部分に属する。

第2トレンチ（第6・17図・図版4）

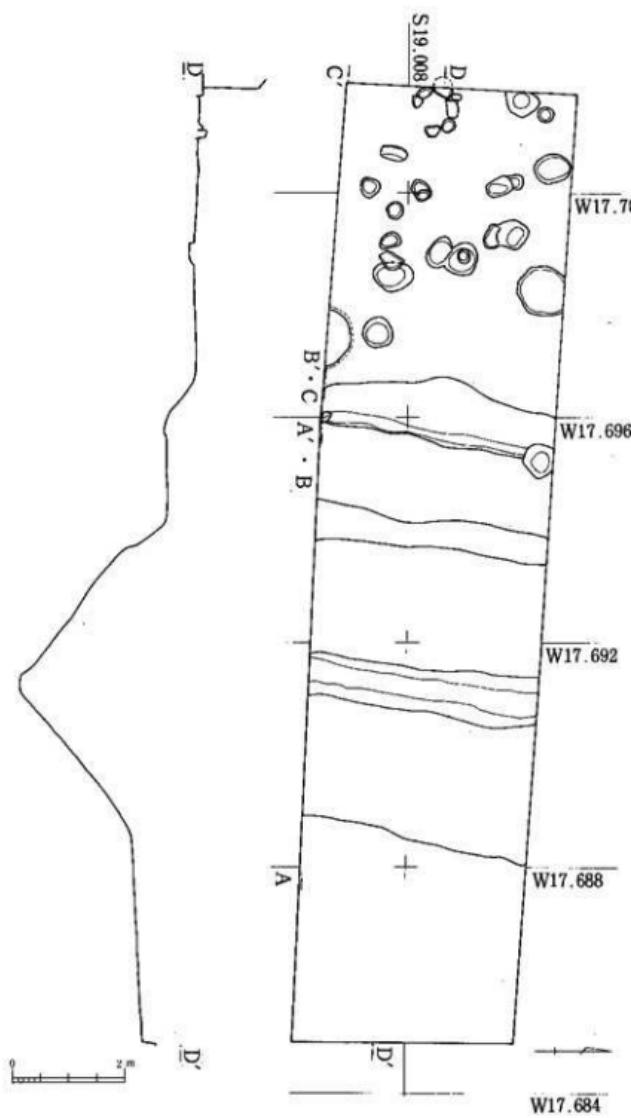
第1トレンチと第3トレンチのほぼ中間に設定した、幅5m、長さ10mのトレンチである。

遺構は、いずれもローム層を掘り込み構築されているが、表土下面から堀り込みの認められる中世の堀立柱建物跡と見られる柱穴群、池状遺構と地山面で検出された縄文時代中期の住居跡とが確認されている。

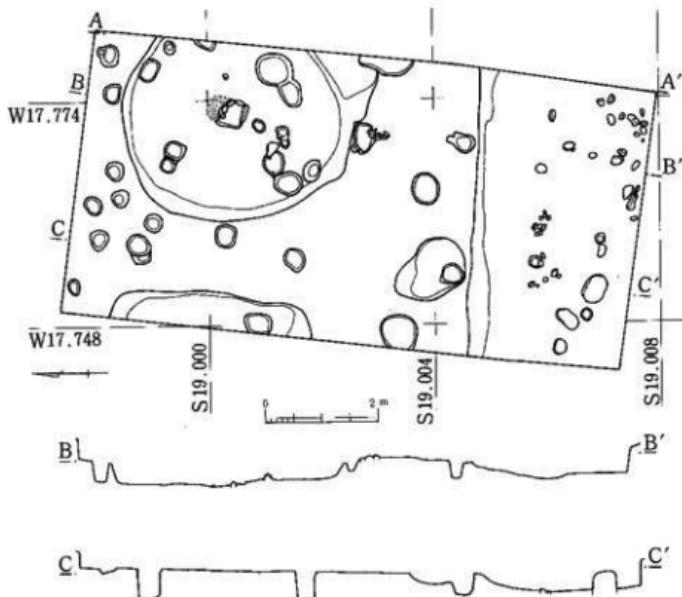
中世の掘立柱建
物跡と見られる柱
穴は3本確認され、
直径40cm、深さ50
~55cmを測り、柱
間は2.8mである。
なお、この柱穴よ
り上部質土器が出
土している。

池状遺構は、ト
レンチ南側で確認
され、ローム面に
厚く酸化鉄が沈澱
している。地山面
からの掘り込みは
30cm程度である。
なお、覆土中には
大小の礫が点在し
ている。

第5・6層は、
縄文時代中期住居
跡の覆土で、地山
面より40cmと比較
的深く掘り込まれ
ているため、遺存
状態は良好である。
遺構は全体のほぼ
5分の4がトレン
チにかかり、直徑
4m弱の円形住居
跡である。炉跡は
ほぼ中央に構築さ
れ、偏平ないしは
棒状の河原石を並
べた小形の方形石
圍炉である。柱穴



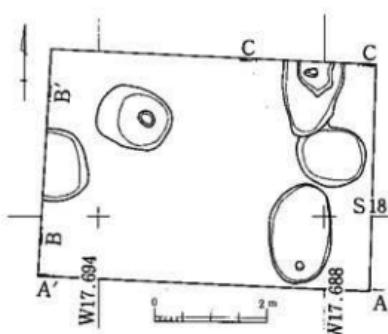
第5図 第1トレンチ平面図 (1:100)



第6図 第2トレンチ平面図 (1 : 100)

は、4本検出され、直徑40~50cm、深さ45~50cmを測る。

遺物は、復元及び復元可能土器は5点、石器は打石斧、凹石等約100点と非常に多い。年代は、土器の特徴から中期前半の藤内I式期である。



第7図 第4トレンチ平面図 (1 : 100)

第4トレンチ (第7・19図・図版5)

東側の細長い地割の延長線上及びその西側にかけて設定したトレンチであるが、その延長線上の畑における作物の収穫が遅れたため、西側のみの調査となった。幅4m、長さ6mのトレンチである。

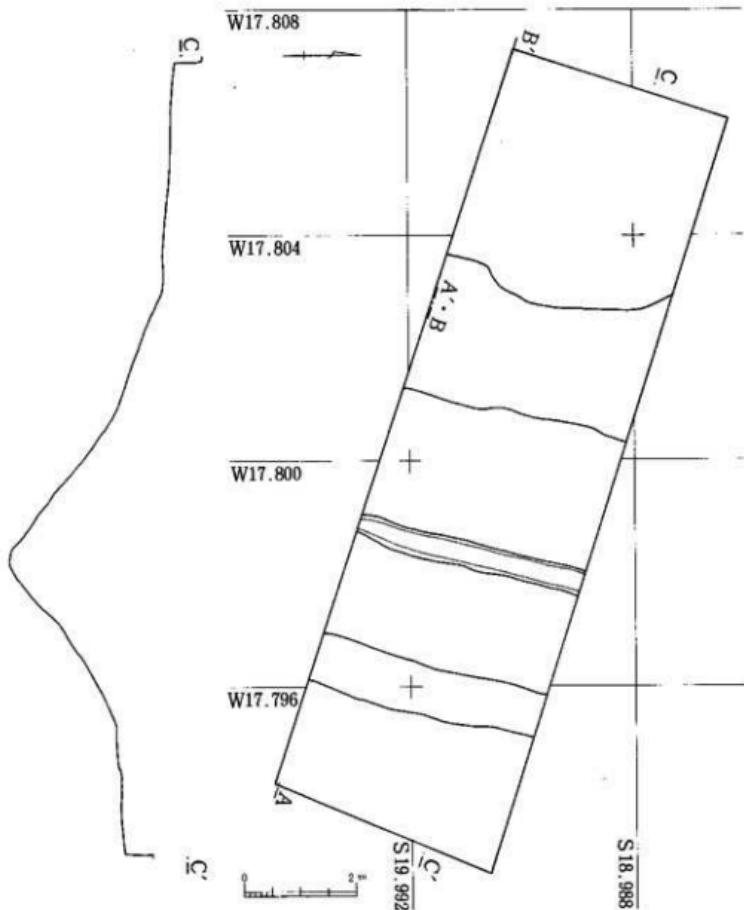
遺構は、東側で第2層を掘り込み、小さい段差をついている。また、土壤が5基検出されているが、掘り込み面に差がある。

遺物は極めて少ないが、東側の土壤覆土中より常滑焼の大甕の破片が出土し、館跡の年代を知る上で貴重な資料である。

第3トレンチ (第8・15図・図版4)

西側の堀跡と見られる細長い地割り部分に設定した、幅4m、長さ14mのトレンチである。空堀跡を除く遺構は、西側に3基の土壙が確認されたのみである。遺物は、縄文中期中葉の上器片及び石器が出土しているが、量的には少ない。

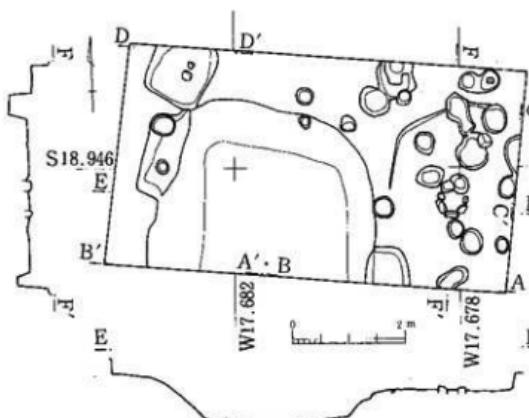
空堀跡は地山面で、西から3mまでは1.1m下がりと比較的緩やかに傾斜するが、そこから急傾斜となり2mで1.7m下がりで、堀底に至る。堀底より東側は3mで1.9m上がり、地山面は平坦となる。地山面で、堀の西側が東側より0.9m高い。なお、堀底には幅40cm、深さ15



第8図 第3号トレンチ平面図 (1 : 100)

cmの水路状の溝が掘り込まれ、北から南へ緩やかに流れている。

空堀跡の上層は、幅5m、深さ1.7~1.9mを測る急傾斜の堀跡の主体部より上層部は、第1層の表土（耕作土・暗褐色土）である。第1層より下部は、第4層上面を境として2層に大別できる。下層は、館廐跡に堀の壁面が風化し崩落した第6層を除けば、白色砂を含む水成堆積物で覆われている。しかし、第1トレンチのように白色砂が顕著ではない。上層は、後世に人為的に埋め戻されたものと見られる。



第9図 第5トレンチ平面図 (1 : 100)

第5トレンチ (第9・18 図・図版5)

東側の細長い地割りの北へ延長した線上に設定した、幅4m、長さ7mのトレンチである。

空堀跡を除く遺構は、空堀の東側に縄文時代中期住居跡が接している。覆土は第2層のロームブロックを含む暗褐色土である。地山面をほとんど掘り込んでいないため、遺存状態は良好とは言えない。遺構は全体の3分の2がトレンチにか

かり、長軸推定4mの楕円形の住居跡と見られる。炉跡は中央やや北側に構築された、偏平の河原石を平たく並べた円形石囲炉である。柱穴は判然としない。炉跡北側に立石がある。

遺物は、復元土器1点、石器は凹石・打石斧等10点が出上している。年代は、土器の特徴から井戸尻式期である。

また、空堀に一部切られて縄文時代中期の単独埋甕がある。

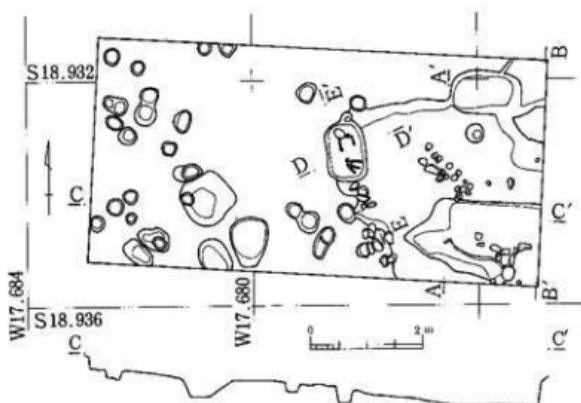
空堀は、第1トレンチのように薬研堀ではなく、地山面上での幅4.6m、堀底幅2.6mで、深さは西側で95cm、東側で55cmを測る浅い溝状となり立ち上がり完結する。

空堀跡の土層は、第4層の白色砂を多量に含む水成堆積物が、第5・6層の自然堆積層を覆っている。

第6トレンチ (第10・20・11図・図版6)

第5トレンチで完結した東側の空堀跡の完結を再確認するため、第5トレンチの北側へ並行して設定した、幅4m、長さ8mのトレンチである。

空堀跡は確認されず、遺構は、中世の掘立柱建物跡と見られるピット群、覆土に水成堆積物



第10図 第6トレンチ平面図 (1 : 100)

の白色砂を含み、地山面に酸化鉄が厚く沈澱している池状遺構、さらに墓壙が上げられる。

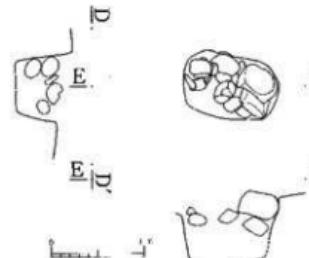
遺物は、縄文時代のものはほとんどない。中世についても、ピット内より土師質土器が出土しているが、量的には極めて少ない。

墓壙は、池状遺構の西側に見られ、平面形は隅丸の長方形を呈する。長軸1.05m、短軸0.70m、

深さは0.7m程度を測る。

墓壙は地山面を掘り込み、人間を1体埋葬している。人骨は、頭部を北壁に押しつけて寝かせ、脚部をくの字に折り曲げている。なお、背骨及び肋骨はすでになくなっている。人骨の上部には、大小の礫を多数積み込み、人骨を覆っている。この礫の中には、割れた石臼等も含まれている。

なお、人骨周辺に古錢及び上器等の副葬品は全く見られず、年代を決定することはできなかった。



第11図 第6トレンチ墓壙 (1 : 60)

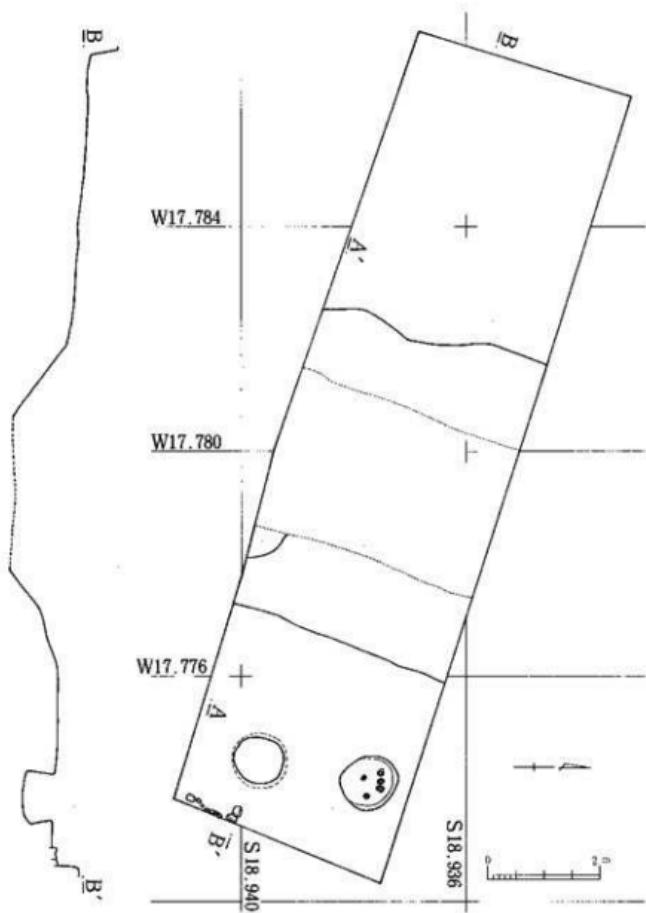
第8トレンチ (第12・16図・図版6)

西側の堀跡と見られる細長い地割り部分に設定した、幅4m、長さ14.5mのトレンチで、第3トレンチより北へ55m離れている。

空堀跡を除く遺構は、堀の東側に小形の土壙が3基検出されたのみである。このうちの1基は、空堀によって切られている。規模は、口径80~100cm、深さは60~80cmである。壁は垂直ないしはやや内湾する。また、遺物は、縄文中期土器片・上師質土器・小形石臼等が出土しているが、量的には極めて少ない。

空堀跡の調査は、第3トレンチの調査結果や地中レーダー探査により、細長い地割り部分は、すべて薬研堀状を呈することが判明したため、第6層の水成堆積物層上面までとした。調査された部分の規模は、地山面を基準として、上面の幅5.5m、深さは西側が1m、東側が0.9m、第6層上面の幅は2.7~2.8mを測る。

空堀内の遺物は、西側の第5層上面より内耳土器が出土している。



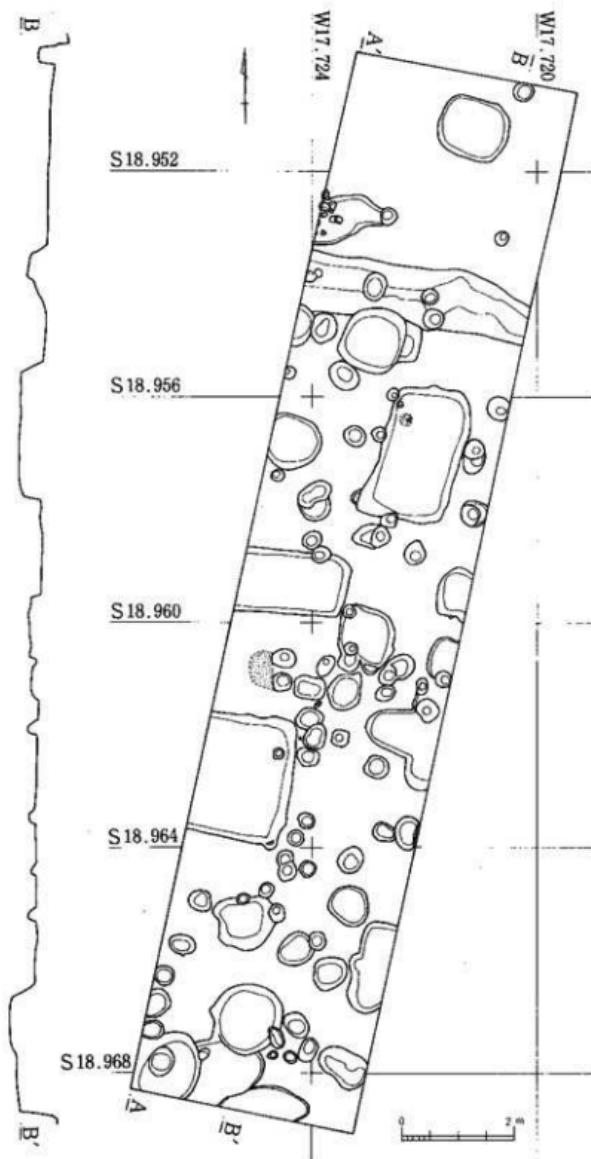
第12図 第8トレンチ平面図 (1 : 100)

第7トレンチ (第13・21図・図版5)

東西の細長い地割り部分がおよそ1町(約110m)離れて位置するため、南側の空堀跡を含め、方1町の郭を想定し、その北側の堀跡の有無を確認するため設定したトレンチである。幅は4mで、長さは19mである。

トレンチ北側に、確認面で幅110cm、深さ35cmの砂層(第2層)からなる、浅い河道状の溝状遺構を検出したものの、空堀跡は検出されなかった。

遺構は、この溝状遺構より南側に濃密に分布し、多数の中世掘立柱建物跡の柱穴群・長方形



第13図 第7トレンチ平面図 (1 : 100)

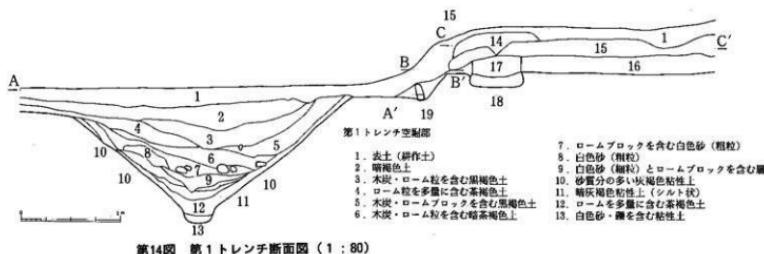
の小形竪穴状遺構、及び縄文中期の土壌等がある。また、中央部付近の地山面で焼上が検出されている。

掘立柱建物跡は、調査区が限定されているため、断片的な柱穴列としての抽出しかできないが、直径25~40cm、深さ40~50cmの柱穴が、1.5~1.6m間隔に3~4本並ぶものが、5列確認されている。

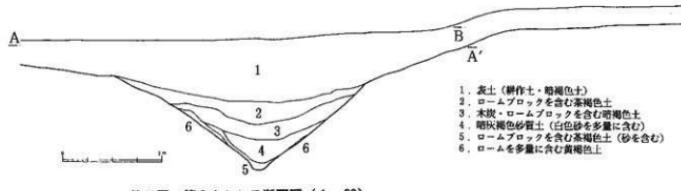
小形竪穴状遺構は、3基確認されている。いずれも長方形であるが、規模に規格性は見られない。覆土は一定しており、第4・5層の木炭を含むローム主体の土層で、固くしまっている。おそらく、使用後埋め戻されたものと見られる。

中世遺物は、溝状遺構周辺より、比較的多量の土師質土器、南側の柱穴上面より、古錢5枚が出土している。

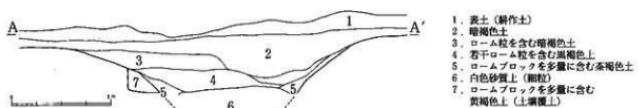
縄文中期の土壌は4基検出され、直径1~1.2mの円形を呈する。年代は、出土土器の特徴から、中葉の井戸尻I式期に比定される。



- 第1トレーンチ空掘区外
- 1. 表土 (耕作土)
 - 2. ロームブロックを多量に含む茶褐色土 (土塊覆土)
 - 3. 地下水
 - 4. 地下水
 - 5. ロームブロックを含む喀斯特褐色土 (土塊覆土)
 - 6. ロームを多量に含む喀斯特褐色土 (風成柱状隙隙)
 - 7. ロームブロックを多量に含む茶褐色土 (土塊覆土)
 - 8. ロームブロックを含む喀斯特褐色土 (土塊覆土)
 - 9. ロームを多量に含む喀斯特褐色土 (風成柱状隙隙)

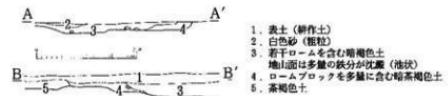
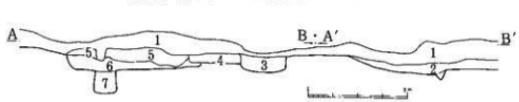


1. 表土 (耕作土)
2. ロームブロックを含む喀斯特褐色土
3. ロームブロックを多量に含む茶褐色土
4. 喀斯特褐色粘性土 (白色砂や多量に含む)
5. 木炭・ロームブロックを多量に含む喀斯特褐色土
6. 木炭・ロームブロックを含む喀斯特褐色土
7. 木炭・ロームブロックを含む茶褐色土 (ビット覆土)
8. 木炭・ロームブロックを多量に含む黄褐色土
9. 木炭・ロームブロックを多量に含む茶褐色土
10. ロームを多量に含む黄褐色土



第19図 第4トレーンチ断面図 (1 : 80)

1. 表土 (耕作土)
2. ロームブロックを多量に含む茶褐色土
3. ロームブロックを多量に含む黒褐色土
4. ロームブロックを多量に含む茶褐色土

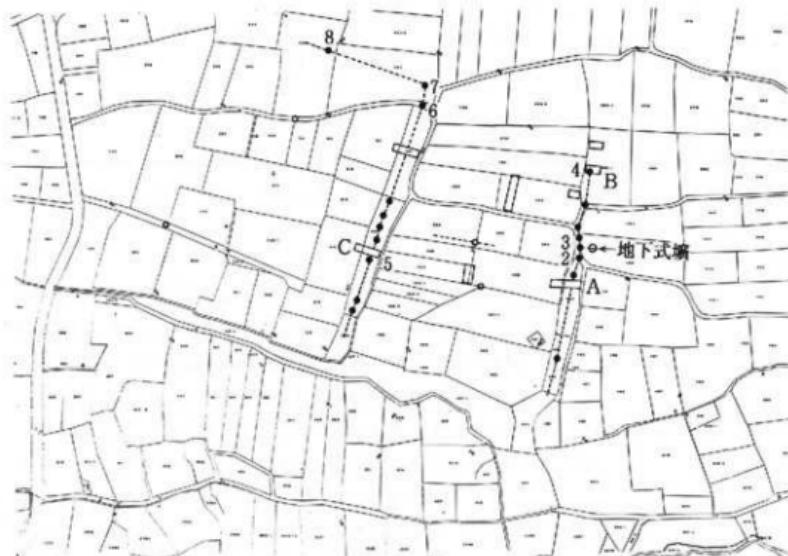


第20図 第6トレーンチ断面図 (1 : 80)

1. 表土 (耕作土)
2. 白色砂 (粗粒)
3. 地下水
4. 地下水
5. ロームを多量に含む喀斯特褐色土 (油状)
6. ロームブロックを多量に含む茶褐色土
7. 茶褐色土



1. 表土 (耕作土)
2. 砂層 (浅い溝・粗粒と細粒の互層)
3. 砂層 (白色砂)
4. ローム粒を含む喀斯特褐色土
5. 木炭を多量に含むロームブロックと喀斯特土の混合土
6. 黄褐色土
7. ロームを含む喀斯特褐色土



第22図 地中レーダー探査結果図 (1 : 3000)

●—堀跡・○—溝状造構・…—堀跡・溝状

造構の位置

図中番号・記号は図版11~13参照

2. 地中レーダー探査結果

今回の発掘調査による地中レーダー探査は、東西の堀跡が延びる細長い地割り部分に挟まれた範囲を中心として、南側を除く隣接部についても行った。なお、西側の部分は、上図の7で堀跡が西に曲がっていることが確認されたため、広範囲に調査を行った。

まず、東側の空堀跡で、細長い地割り部分で3か所、その延長線上で5か所のデータをとった。上図の1・4で、A（第1トレント）・B（第5トレント）とのパターン照合を行った。その結果、上図の3より北へ2つ目のT字路の部分までは、薬研堀のパターンを確認できるが、さらに北側のポイントでは、浅いV字状となり、上図の4で完結していることが確認できる。

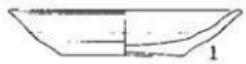
西側の空堀跡では、9か所のデータをとり、上図の5で、C（第3トレント）とのパターン照合を行った。その結果、上図の6より南側では、深いV字形の堀跡パターンを確認できた。しかし、6以外では覆土の状況から反射状態は弱い。なお、堀跡は上図の7で浅いV字状となり、北から西へと曲がり、8を通って延びていることが確認できる。8での規模は、B（第5トレント）程度と考えられる。

その他、東西の空堀に挟まれた部分及び西側の空堀のさらに西には、溝状造構と見られるパターンが何か所か確認された。しかし、北側の堀跡は確認できなかった。

以上の結果から、館跡の範囲は西に広がる可能性が大きくなかった。

IV 遺 物

第23図 第1トレンチ掘底出土土器 (1 : 3)



土師質土器 (第23~28図・図版7・8)

各トレンチから出土した土師質土器は、皿・小皿を中心にかなりの量にのぼり、その大半は第7トレンチに集中している。実測できたものは24点である。

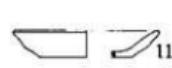
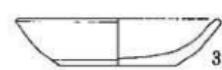
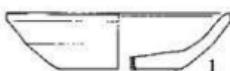
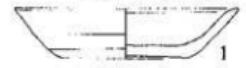
第24図 第2トレンチ出土土器 (1 : 3)



第23図 第1トレンチ堀底出土皿。底径6.7cmを測る。内面ロクロ撫でを行い、見込み中央がやや凹む。外面はロクロ撫でを行うが、調整は粗い。底部は回転糸切りである。胎土に金雲母を含み、焼成は良好、外面赤褐色を呈する。

第24図-1 第2トレンチ掘立柱建物跡の柱穴内出土。皿。口径12.3cm、器高2.5cm、底径6.6cmを測る。内面はロクロ撫でを行い、見込み中央がやや凹む。外面はロクロ撫でを行うが調整は粗い。底部は回転糸切りである。内外面に煤が付着し、燈明皿として使用されたものと見られる。胎土に金雲母を含み、

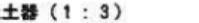
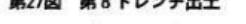
第25図 第5トレンチ出土土器 (1 : 3)



第26図 第6トレンチ出土土器 (1 : 3)



第27図 第8トレンチ出土土器 (1 : 3)



焼成は良好、赤茶褐色を呈する。 24—2. 第2トレンチ出土。皿。底径7.6cmを測る。内外面ともロクロ撫でで、外面の調整は粗い。底部は回転糸切りである。胎土に金墨母を含み、焼成は良好で、淡茶褐色を呈する。 24—3. 第2トレンチ出土。皿。底径6.7cm。内外面ともロクロ撫でで、見込み中央は凹む。底部は回転糸切りである。胎土は精選され、焼成も良好、赤褐色を呈する。

第25図—1. 第5トレンチ出土。皿。内外面ともロクロ撫でで、外面の調整は粗い。胎土は精選、焼成も良好、赤茶褐色を呈する。 25—2. 第5トレンチ出土。皿。底径6.7cm。内面はロクロ撫でで、見込み中央がやや凹む。外面ロクロ撫で、底部は回転糸切りである。胎土は精選、焼成も良好、淡茶褐色を呈する。

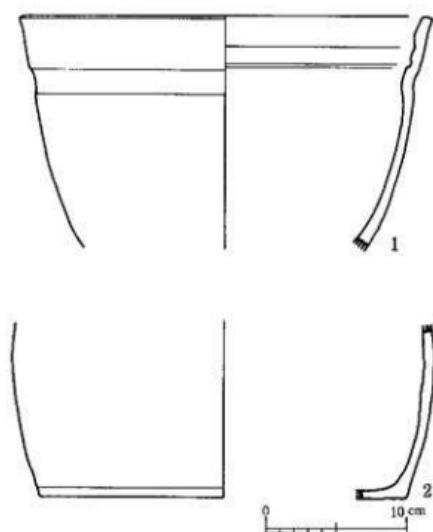
第26図—1. 第6トレンチピット内出土。皿。口径12.0cm、器高2.7cm、底径6.7cmを測る。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りである。胎土は精選、焼成も良好、茶褐色を呈する。内外面とも煤が付着し、燈明皿として使用されたものと見られる。 26—2. 第6トレンチ出土。皿。内外面ともロクロ撫で、外面の調整は粗い。胎土は精選、焼成も良好で、赤茶褐色を呈する。 26—3. 第6トレンチ出土。小皿。内外面ともロクロ撫でで、底部は回転糸切りである。胎土は精選、焼成も良好、赤茶褐色を呈する。

第27図. 第8トレンチ出土。小皿。底径4.7cm、器高2.5cmを測る。内外面ともロクロ撫でで、外面の調整は粗い。底部は回転糸切り無調整である。胎土に金墨母を含み、焼成は良好、淡茶褐色を呈する。内面に煤が多量に付着し、燈明皿に使用されたものと見られる。

第28図—1. 第7トレンチ出土。皿。器高3.0cm。内面はロクロ撫でで、見込みはやや凹む。外面はロクロ撫でで、調整は粗い。底部は回転糸切りである。胎土は精選され、焼成も良好、淡茶褐色を呈する。 28—2. 第7トレンチ出土。皿。底径6.0cm。内面ロクロ撫でで、見込みがやや凹む。外面はロクロ撫でで、調整は粗い。底部は回転糸切りである。胎土は精選、焼成も良好、赤茶褐色を呈する。 28—3. 第7トレンチ出土。皿。器高2.5cm。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りで、中央は器厚が薄い。胎土は精選、焼成も良好、暗茶褐色を呈する。 28—4. 第7トレンチ出土。皿。底径6.5cm。器面の磨滅が著しい。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りである。底部中央の器厚は薄い。胎土は精選、焼成も良好、淡茶褐色を呈する。器面に煤が付着している。 28—5. 第7トレンチ出土。皿。底径6.2cm、器高2.6cmを測る。器面の磨滅が著しい。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りであり、底部中央の器厚は薄い。胎土は精選、焼成も良好、淡茶褐色を呈する。 28—6. 第7トレンチ出土。皿。底径6.3cm。内外面ロクロ撫でで、見込み中央はやや凹む。底部は回転糸切りである。胎土は精選、焼成も良好、淡茶褐色を呈する。 28—7. 第7トレンチ出土。皿。器高2.2cm。内外面ともロクロ撫で、外面の調整は粗い。底部は回転糸切りである。胎土は精選、焼成も良好、淡茶褐色を呈する。 28—8. 第7トレンチ出土。小皿。口径8.8cm、器高2.1cm、底径5.3cmを測る。内外面ともロクロ撫で、外面の調整は粗い。底部は回転糸切りである。胎土は精選、焼成も良好、淡茶褐色を呈する。 28—9. 第7トレンチ出土。小皿。底径5.4cm。内外面ロクロ撫で、底部は回転糸切りである。胎土は精選、焼成も良好、淡茶褐色を呈する。

28-10. 第7トレンチ出土。小皿。底径4.9cm。内外面ロクロ撫で、見込み中央が凹む。底部は回転糸切りである。胎土は粒子を多量に含み、焼成は良好、茶褐色を呈する。 28-11. 第7トレンチ出土。小皿。器高4.9cm。内外面ロクロ撫で、底部は回転糸切りである。底部の器厚は極めて薄い。胎土は精選、焼成も良好、黒褐色を呈する。 28-12. 第7トレンチ出土。皿。内外面ともロクロ撫でを行う。胎土は粒子を多量に含み、焼成は良好で、茶褐色を呈する。

28-13. 第7トレンチ出土。皿。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りである。胎土に金雲母を含み、焼成は良好、淡茶褐色を呈する。 28-14. 第7トレンチ出土。皿。内外面ロクロ撫で、底部は回転糸切りである。胎土に金雲母を含み、焼成は良好、暗茶褐色を呈する。



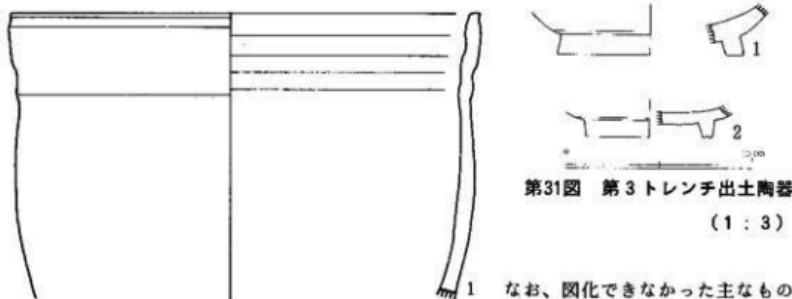
第29図 第1トレンチ堀底出土土器 (1:4)

内耳土器 (第29・30図・図版7・8)
内耳土器は、第1・8トレンチ空掘内
より各2点ずつ出土している。

第29図-1. 第1トレンチ堀底出土。
内外面ともロクロ撫でを行い、胴部と口
縁部は外面が凹面、内面は稜をつくり明
瞭に区切る。口縁部内面には凹面をつけ、
端部は面をもつ。胎土は粒子を多量に含
み、内面茶褐色を呈する。 29-2. 第
1トレンチ堀底出土。内外面ともロクロ
撫でを行い、底部とは明瞭に区切る。胎
土は粒子を多量に含み、内面暗茶褐色を
呈する。外面には多量の煤が付着してい
る。

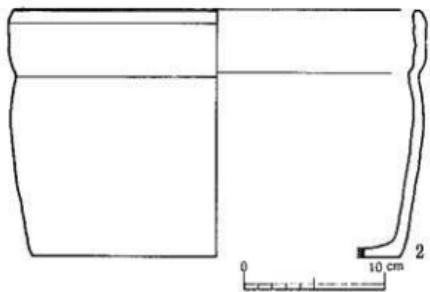
第30図-1. 第8トレンチ堀壁際出土。
内外面ともロクロ撫でを行い、胴部と口
縁部は外面が2条の凹面、内面は稜によ
って区切る。口縁部内面には凹面をつけ、端部は面をもつ。胎土は粒子を多量に含み、内面暗
褐色を呈する。外面には多量の煤が付着してい
る。 30-2. 第8トレンチ堀壁際出土。器高
17.6cm。内外面ともロクロ撫でを行い、胴部と口縁部は外面が凹面、内面は稜をつくり明瞭に
区切る。口縁部内面には弱い凹面をつけ、端部は面をもつ。胎土は粒子を多量に含み、内面灰
茶褐色を呈する。外面胴部に煤が付着してい
る。

中世陶器 (第31・32図・図版7)
陶器類は、第3・4・5・7トレンチより14点出土しているが、小片が多く、岡化できたもの
のは3点である。



第31図 第3トレンチ出土陶器
(1 : 3)

1 なお、図化できなかった主なものには、口縁が垂直に近く、端部に稜をもつ天目茶碗、胴部にヘラによる整形痕をもつものや廉状の押印のある常滑の壺などがある。



第30図 第8トレンチ堀内出土土器 (1 : 4)

部は折り返して、縁帯を極端に幅広くし、その断面はN字状を呈する。肩の張りは顕著である。なお、内外面ともロクロ撫で調整である。外面は暗赤褐色を呈し、器肌に斑状の自然釉が附っている。この大壺の年代は、これらの特徴から14世紀後半に位置づけられる。

第31図-1・2、第3トレンチ出土。いずれも碗と見られる。内外面ロクロ撫で、底部回転糸切り後、高台を貼り付ける。内面は鉄釉を施し、茶褐色を呈する。

第32図、第4トレンチ出土。常滑焼大壺。口縁部から肩部にかけての破片である。口径推定37.6cm。口縁



第32図 第4トレンチ出土陶器 (1 : 4)

古銭（第33図・図版8）

古銭は、第7トレンチの同一地点から、5点まとめて出土している。同時に廃棄されたと見られることから、5枚のうち最も新しい「洪武通宝」の年代（1368年）より新しい時期の所産である。

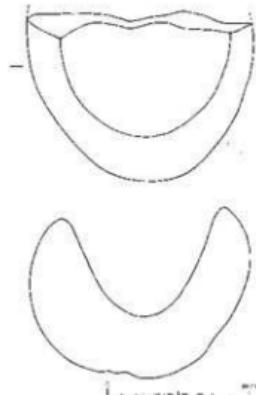


第33図 第7トレンチ出土古銭（1:1）

図番	名 称	年 代	西暦	備 考
1	開元通宝	唐 武德4年	621	
2	皇宋通宝（真）	北宋 宝元2年	1039	
3	熙寧元宝（篆）	北宋 熙寧元年	1068	
4	元祐通宝（篆）	北宋 元祐元年	1086	
5	洪武通宝（篆）	明 洪武元年	1368	

凹石状石器（第34・36図・図版9）

第1トレンチと第6トレンチより各1点している。いずれも安山岩で梢円体の礫を使用している。第1トレンチのものは廃棄段階、第6トレンチのそれは使用開始段階のものである。



第34図 第1トレンチ堀底出土石器（1:4）

第34図、第1トレンチ堀底出土。半分欠損している。外形は短径が11.5cm、厚さ11.8~12.3cmを測る。凹み部は直径が12.0cm、深さ7.0~8.0cmである。凹み面は若干磨滅しているので、使用中に割れたものと思われる。底面は若干加工した痕跡が見られるが、接地面は小さく安定しない。

第36図-3、第6トレンチ墓壙内出土。外形は、長径19.0cm×短径13.5cm、厚さ10.0cmを測る。凹み部は小さく、直径2.5cm、深さ0.8cmである。凹みは浅く、外周の稜も明瞭ではない。凹み面に滑らかさはない。使用直前の段階のものと考えられる。底面はやや加工され、安定している。

石臼（第35～38図・図版9・10）

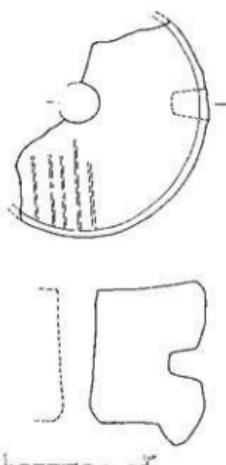
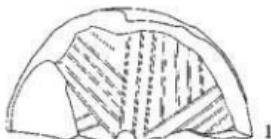
石臼は、第2・6・8トレンチより破片ながら4点出土している。そのうち、第8トレンチの石臼は小形である。石材はすべて安山岩である。

なお、第38図は、第2トレンチの西で耕作中に発見された上下一対の石臼である。

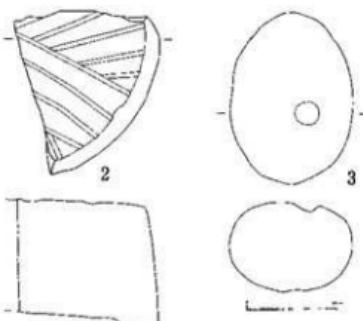
第35図、第2トレンチ出土。穀磨臼の下臼である。約2分の1残存しているが、外縁の破損が著しい。磨面はかなり磨耗している。溝は一分画に5溝認められ、全体では6分画と推定される。芯棒穴は、中心からずれているようである。縁部の厚さは7cmを測る。



第35図 第2トレンチ出土石臼
(1 : 5)



第37図 第8トレンチ出土石臼
(1 : 4)

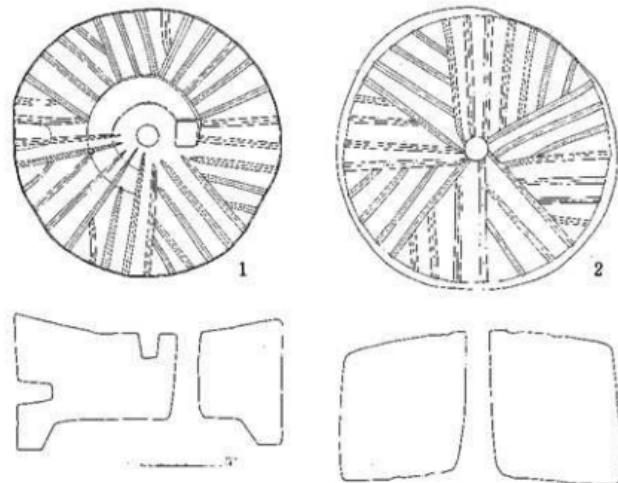


第36図 第6トレンチ墓塚出土石臼・凹石状石器
(1 : 5)

第36図-1. 第6トレンチ墓塙内出土。穀磨臼の下臼である。約2分の1が残存しているが、外縁の破損が著しい。磨面はやや磨耗している。溝は1分画に6~7溝認められ、全体では8分画と見られる。芯棒穴は中心からややすれている。縁部の厚さは13.5cmである。 36-2.
第6トレンチ墓塙内出土。穀磨臼の下臼である。約4分の1が残存している。磨面は磨耗が少なく、溝もV字形に近い。溝は1分画に4溝認められ、全体では8分画と見られる。縁部の厚さは13cmを測る。

第37図. 第8トレンチ出土、抹茶臼の上臼である。約5分の2が残存している。磨面は磨耗が著しく、溝も5本かすかに見えるだけで、分画数は不明である。縁部で厚さ11.7cmを測る。

第38図. 第2トレンチ西で発見された、上下一対の穀磨臼である。上下ともほぼ光形である。上下臼とも磨面はよく磨耗しているが、溝やものくばりは刻み直したものと見られ、断面V字形を呈している。上臼の溝は、1分画に4~5溝認められ、全体では8分画である。下臼の溝は、1分画に3~4溝を単位とするが、1分画のみ7溝と多い。全体では8分画である。縁部の厚さは上下臼とも14~15cmを測る。



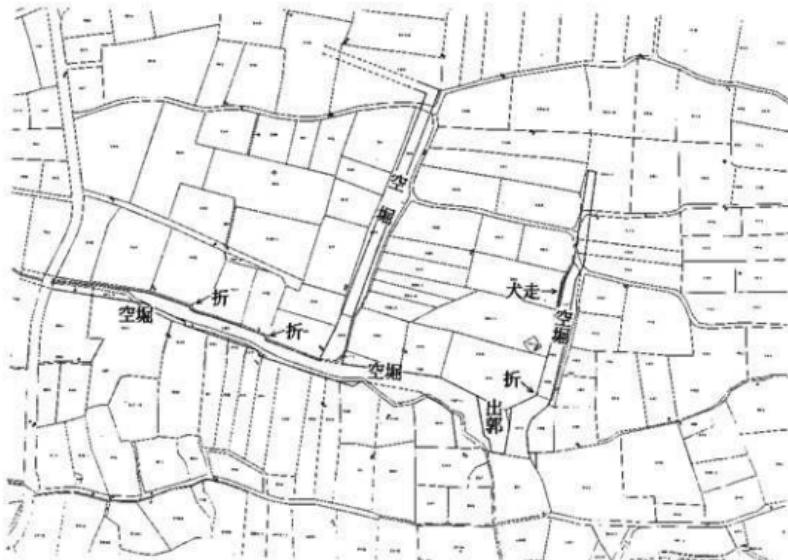
第38図 第2トレンチ西発見石臼 (1 : 5)

V ま と め

今年度の調査は、堀後を中心とした館の範囲を確認することに主体をおいたため、全容を知るに至っていないが、現況・文献等を加味すると、幾つかの事実を上げることができる。

まず、遺構について見れば、東側の空堀は北側の一部を除き薬研堀で、内郭側に犬走りをもつ。先端は西に「折」をつくり、南に開き、南側の空堀との間には小さな出郭をもつ。南側の空堀は東側 200m 以上あり、西側に 2か所「折」をつくる。東側の空堀から西へ約 1町隔てて西側の空堀があり、薬研堀に近い V 字形を呈し、約 160m 延び、そこから浅い溝状となり、西に延びている。これらの事実から、この館は東西の空堀に挟まれた部分のみならず、西側に広がる、大規模なものであった可能性が強くなり、範囲を確定するに至らなかった。

次に、教来石民部館跡の成立から廃止までの間の存続期間についてみると、II-2 「歴史的環境」でも述べたように、一蓮寺を開基した一条時信が、教来石氏を含むその諸子を武川筋に分封したのに始まるとしてある。この分封を受け、館を構えた時期は、『一蓮寺過去帳』に見える時信の没年、元亨元（1321）年に近い時期である鎌倉時代末期と見て差し支えないものと考える。また、時信に近い教来石氏の子孫では、貞治二（1363）年に毛浦吉、法名性阿が卒していることからも明らかである。



第39図 教来石民部館跡遺構現況図 (1 : 3000)

この館が、廃止された時期については、天文十五（1546）年に教来石民部景政が、馬場民部と姓を改め、武田家の重臣に加わっていることから、この前後と見られる。のことから、この館の存続期間は、14世紀前半から16世紀中頃までであろう。

さらに、出土品では、日用雑器である土師質土器（かわらけ）をその特徴から三時期に分類することができる。第1は、第5・6トレンチ出土のものである。底部は回転糸切りで、体部との境目は丸みをもつ。体部はやや薄手で、直線的に口縁を開く。口縁端に稜をもつ特徴があるこれらに近接した第4トレンチの古い時期の土壤より、14世紀後半に比定される常滑焼の大甕が出土しており、これらの土師質土器も同時期と考えられる。

第2段階は、第7トレンチ出土の土師質土器である。底部は回転糸切りで、体部との境目は丸みをもち、見込み中央がやや凹む。体部はやや厚手で、体部下半にやや膨らみをもち、直線的に口縁を開く。口縁部は面をもつ。法量的には底径が広く、 $\text{口径} < \text{底径} \times 2$ の範囲に入る。これらの土師質土器は、年代を確定できる共伴遺物がないため断定できないが、その特徴から見て、15世紀代に位置づけられよう。

第3段階は、第1・2・8トレンチ出土のもので、特に第1トレンチのそれは、堀底より内耳土器等と出土している。底部は回転糸切りで、体部との境目を明瞭な稜で区切る。見込み中央はやや凹む。体部はやや厚手で、膨みをもつ。口縁はやや外反し、端部を丸くおさめる傾向がある。法量的には底径が比較的小さく、 $\text{口径} \leq \text{底径} \times 2$ となっている。これらの土師質土器は、特徴から見て、第2段階に続くもので、15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる。

参考文献

- | | | | |
|-------------|------|-------------------------|---------------|
| ・野出道孝 | 1986 | 「第1章 地形と地質」『白州町誌』 | 白州町 |
| ・新津健 | 1986 | 「第1章 考古」『白州町誌』 | 白州町 |
| ・清水小太郎 | 1986 | 「第3章 中世」『白州町誌』 | 白州町 |
| ・甲斐叢書刊行会 | 1974 | 『甲斐国志』 | 『甲斐叢書第11・12巻』 |
| ・甲斐叢書刊行会 | 1974 | 『甲陽軍艦』 | 『甲斐叢書第4・5巻』 |
| ・甲斐叢書刊行会 | 1974 | 『一蓮寺過去帳』 | 『甲斐叢書第8巻』 |
| ・山梨県北巨摩郡教育会 | 1930 | 『北巨摩郡勢一斑』 | |
| ・佐藤八郎他 | 1984 | 『中山砦』 | 武川村誌編纂室 |
| ・山田 清 | 1983 | 『佐尾墨跡』 | 小瀬沢町 |
| ・折井 敏 | 1988 | 『坂下遺跡』 | 白州町教育委員会 |
| ・坂本美夫 | 1983 | 『山梨県に於ける15世紀以降の土師質土器編年』 | 山梨県考古学会 |
| | | 『甲斐考古20の1』 | 須玉町教育委員会 |
| ・山路恭之助 | 1984 | 『中尾城遺跡他』 | 小瀬沢町教育委員会 |
| ・佐野勝広 | 1986 | 『宮原遺跡』 | 土岐市美濃陶磁歴史館 |
| ・田口昭二 | 1985 | 『美濃窯の一三〇〇年』 | 淡交社 |
| ・加藤唐九郎 | 1972 | 『日本陶器大辞典』 | 金剛社 |
| ・矢部倉吉 | 1973 | 『古鉄と紙幣 収集と鑑賞』 | |
| ・日本貨幣商協同組合 | 1982 | 『日本貨幣型録 1982年版』 | |
| ・橋崎彰一他 | 1976 | 『瀬戸・美濃』 | 中央公論社 |
| ・赤羽一郎他 | 1977 | 『常滑・瀬戸』 | 中央公論社 |
| ・手塚和義他 | 1986 | 『山梨県の中世城館跡』 | 山梨県教育委員会 |
| ・磯貝正義他 | 1980 | 『長野・山梨』 | 新人物往来社 |

図 版



教来石民部館跡遠景
(笛尾砦より)



教来石民部館跡より
見た笛尾砦



教来石民部館跡現況





第1トレンチ全景



第1トレンチ
左一空堀・右一犬走り



第1トレンチ下層
縄文中期住居跡



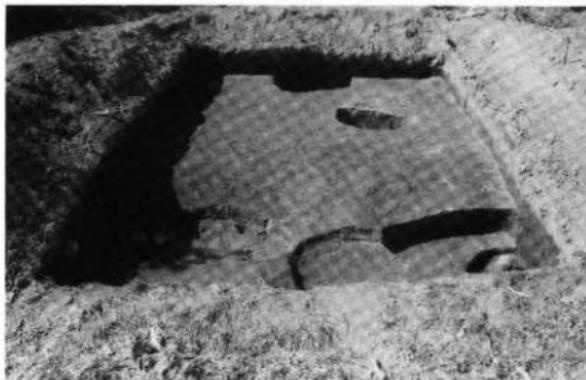
第2トレンチ北側
縄文中期住居跡



第2トレンチ南側
池状遺構



第3トレンチ
空堀発掘状況



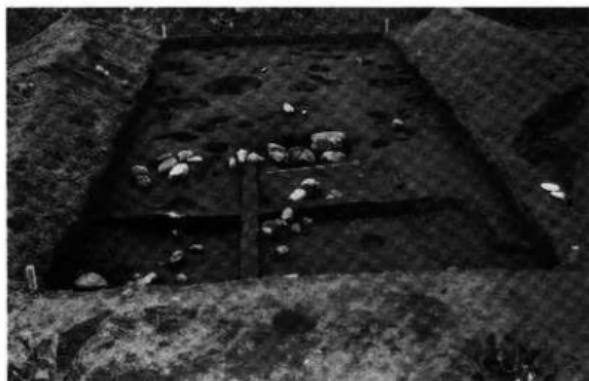
第4トレンチ全景



第5トレンチ全景
手前—縄文中期住居跡
奥—空崩



第7トレンチ全景
柱穴群・小豎穴遺構



第6トレンチ全景
手前—池状遺構
中央—墓壇上層集石



第6トレンチ
墓壇内人骨出土状況



第8トレンチ全景



第1トレンチ堀底出土
土師質土器



第1トレンチ堀底出土 内耳土器



第2トレンチ出土 土師質土器



第3トレンチ出土 中世陶器



第4トレンチ出土 中世陶器（常滑大甕）



第5トレンチ出土 土師質土器



第6トレンチ出土 土師質土器



第7トレンチ出土 土師質土器



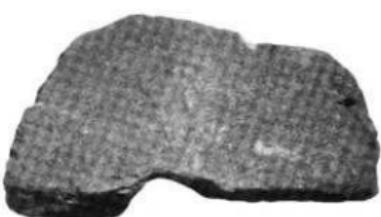
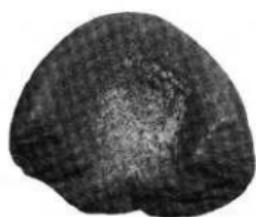
第8トレンチ出土
土師質土器



第8トレンチ堀内出土 内耳土器



第7トレンチ出土 古銭



第2トレンチ出土 石臼



第1トレンチ堀底出土 凹石状石器

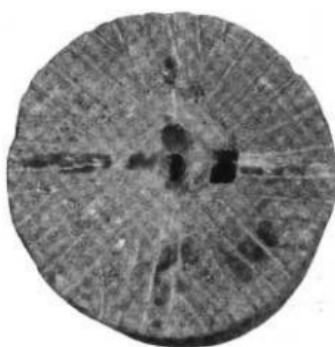
第8トレンチ出土 石臼



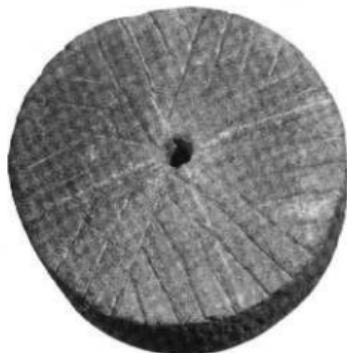
第6トレンチ墓壙出土 石臼



第2トレンチ西発見 石臼
(上臼・下臼)

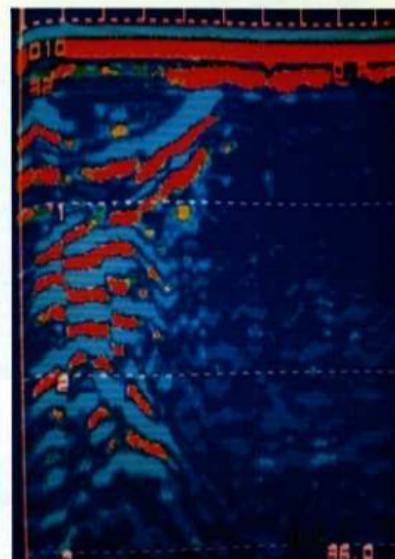
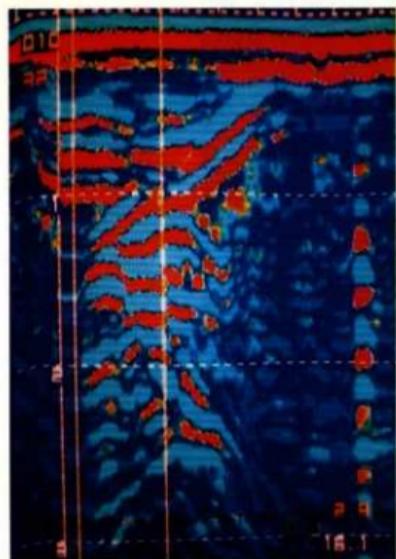


同 上臼



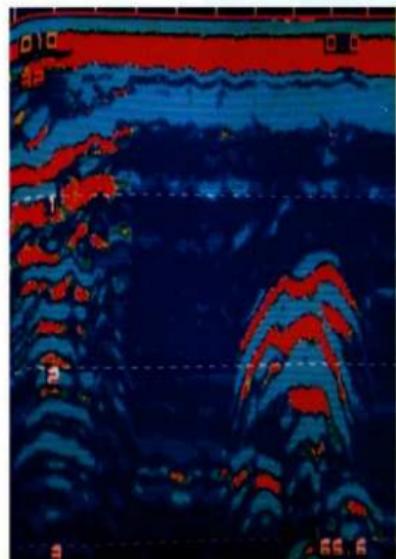
同 下臼



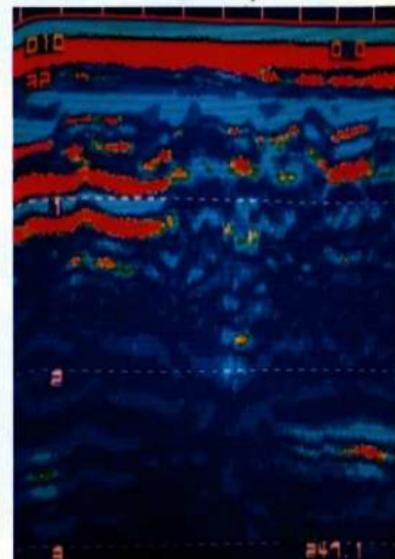


1

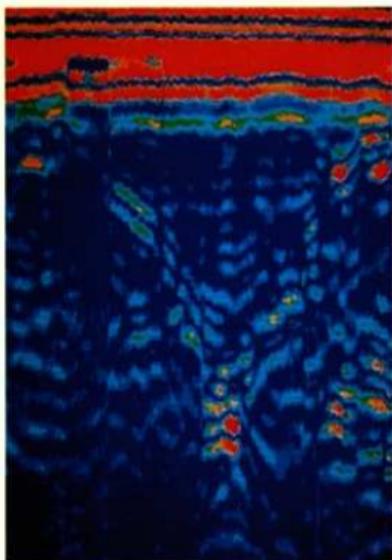
2



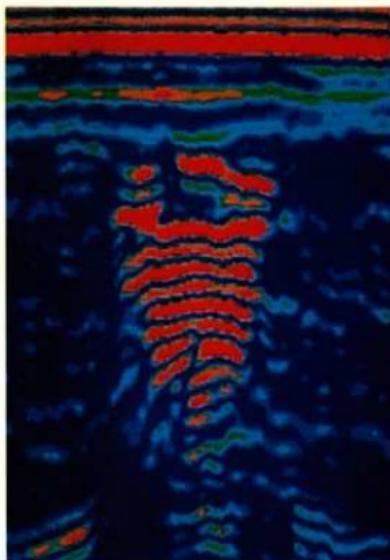
3



4



5



6



7



8

教 来 石 民 部 館 跡

平成元年3月25日印刷

平成元年3月31日発行

編集・発行 白州町教育委員会
山梨県北巨摩郡白州町白須312
電話 0551-35-2121

印 刷 鎏 ヨ ネ ャ 印 刷
甲府市丸の内一丁目14-6
電話 0552-35-4311㈹

